花川病院

症　例　概　要　90歳代女性

診断名：　誤嚥性肺炎後の廃用症候群

入院期間：A年　B月～C月

入院までの経過：A年4月入所施設にて嚥下不良となり救急搬送。前医で誤嚥性肺炎と診断され、約1か月点滴管理を受けていた。前医STの評価と「老衰・認知症末期による食思不振、嚥下機能の低下」と判断され、ポート留置での療養生活を勧められた。しかし、ご家族は、「どうしても口から食べされてあげたい」という思いを抱きケアマネに相談。経口摂取へのリハビリに力を入れる花川病院を紹介され、希望を託して転院となった。

内　　容

経過：入院時の患者は、重度の廃用症候群で体力が著しく低下。発語は乏しく、声量低下、心不全と重度の低栄養を併発し、ADLは全介助でほぼ寝たきりの状態であった。

入院後は難聴に対して集音器を活用して、積極的な声掛けとコミュニケーションを継続することで次第に発語が増加。心不全の管理のもと、離床時間の確保や口腔ケア・肺炎予防など、チームで全身状態の安定を図っていった。STの評価では嚥下機能の保持が確認され、「ゼリーが美味しい」「食べたい」との発語が聞かれた。本人の意思と機能が一致したタイミングを見逃さず、経口摂取への挑戦が始まった。

一時は、トイレ動作も試みるが、疲労感が強くなり食事量の低下や浮腫の出現。チームと家族で目標を再設定し、「3食車椅子で食事をすること」 を最優先ゴールとした。これはご家族の強い希望であり、次の施設での生活継続の条件でもあった。目標に向けたチームでの関わりで、3食車椅子での自力摂取が可能になり、退院前には屋外散歩を楽しむまでに回復。本人からはずっとここに居たいという言葉が聞かれ、ご家族からは心温まる感謝の手紙をいただいた。

その信頼をもとに、退院先として系列で隣接する老健「オアシス」を希望され、シームレスな連携を実現。栄養士より嗜好情報を共有し、現在も3食しっかり経口摂取が継続されている。排泄動作も自立に向かい、余暇活動やイベントにも参加しながら笑顔で穏やかな生活を送っている。

この症例は、本人と家族の思いに寄り添いながら、回復期から生活期へと切れ目なく支援をつなぎ、さらなるQOLの向上を実現できた症例である。

＜各職種の関わり＞

・医師：心不全の管理、治療。　本人・家族に寄り添った丁寧な病状説明

・看護師：肺炎の再発予防、口腔保清、全身管理をしながらの離床時間の確保

・介護士：集音器の使用方法を作成し、コミュニケーションの促進。褥瘡予防

・理学療法士：重度低栄養・廃用症候群に対しての離床時間拡大の介入

・作業療法士：安全で安楽な食事のポジショニング、車いすの選定、シーティング

・言語聴覚士：嚥下機能訓練、コミュニケーション訓練、食事形態の選定

・薬剤師：医師と連携し心不全悪化予防、ポリファーマシー管理

・MSW：本人・家族の意向・希望の確認。希望に沿った退院先の選定と調整

・栄養士：重度低栄養に対する改善の介入、味付けを本人の好みするなど工夫

・歯科衛生士：義歯の作成と口腔ケアで誤嚥性肺炎の予防

・ご家族：頻回な面会と精神的フォロー

入院時FIM運動項目15点　認知項目15点　→ 退院時FIM運動項目28点　認知項目16点